

「第 22 回 FD フォーラム」

場所：京都コンサートホール 大ホール
期間：2017 年 3 月 4 日

1. 研修の内容

「大学の教育力を発信する～教養教育改革と現代社会～」と題したシンポジウムに参加した。

第 1 報告者の林啓介先生（京都三大学教養教育研究・推進機構 特任教授）から「現代「教養教育」の課題」として、戦後大学の歩みと「教養教育」を三期間に分けて振り返ることから現代社会における課題を提示された。これまで、「教養教育」とは専門教育に入る前に、他の分野を学ぶことが専門教育にとっても有用というレトリックのもとに居続けがなされてきた。大学の大衆化が進むにつれ、企業からは現代社会への「適応力」が要求され、大学も例外ではなくなっている。しかし、現代社会を「変革する力」こそが必要とされるものではないか、これを養うことが「教養教育」の課題であるとの指摘であった。言い換えると、実用性や必要性、有用性、利便性から「自由」になる”Liberal Arts”を大学の全課程に据えるべきという主張が展開された。

第 2 報告者の日比嘉高先生（名古屋大学大学院文学研究科教授）から「「大学教養」で何を学ぶのか」と題して報告があった。

理念としては、大学教育は国家、市場から自律すべきであるけれども、実態としてはそうはなっていないことが指摘された。また、「4年」という結果が出るには短い年限で人材育成が完了することを期待するのは無理があるとのことであった。「大学教養」では、以下の四点を学ぶべきであるという。

1. リテラシーの補完と高度化（読み書き能力）

2. 興味関心の拡大（知識）

知識そのものは Wikipedia にはかなわないので、図書館の使い方など、アーカイブ活用力としての検索能力を高めることを指す

3. 知的な創造を行うための行動特性（コンピテンシー）の獲得（行動様式）

OECD : Key Competency が参考になる

4. 自己成長能力の伸張

とりわけ人文社会科学系の教養教育はリテラシーの再構築を目指すことが肝要であるとの主張であった。

第 3 報告者の鬼塚哲郎先生（京都産業大学文化学部教授）から「＜言語化実践＞と＜振り返り＞が受講生の成長を促す授業」という実践プログラムの報告があった。

京都産業大学では教養教育の一環としてキャリア教育を位置づけている。キャリア教育を 4 領域に分け、とりわけ低単位・低意欲学生支援を目的としたキャリア Re-デザイン授業を実施している。そこでは、教員だけが授業に関わるのではなく、職員、民間事業者、卒業生、社会人専門職、学生ファシリテーターが運営側として受講生の「自己」と「他者」の出会いを支援している。ここでは、受講生と運営側が同じ市民として主体的に思考し行動する場を目指している。その結果、受講生も運営側も「学び合う場の再獲得」が可能になっている。

報告後のパネルディスカッションでは、フロアからこうした議論の場に学生の参加をもっと促すべきではないかという意見や「教養教育」の共通理解はあるのかという質問があった。残念ながら共通理解がないとの見解が示された。

2. 研修の成果

「専門教育」の担当者として在籍しているため、「教養教育」について今ひとつ理解できていなかったが、今回の研修に参加することで、戦後の大学教育と教養教育の位置づけや教養教育の先生方がどのような取り組みをされてきたかについて学ぶことができた。特に印象深かった点は、教養教育には共通理解がないことである。今回の報告でも第1報告者の林啓介先生は、産業界からの要請である「能力開発」（リテラシー能力、コミュニケーション能力など）には教養教育は一線を引くべきであるとの立場であるのに対し、第2報告者の日比先生は教養教育、専門教育を通じて「能力開発」を行うことを推奨されていた。どちらの先生も国公立大学の教育であるが、統一見解がないことが教養教育の難しさのように感じた。

しかし、第3報告者の鬼塚先生は私学教員の立場から、「能力開発」をさらに肯定的にとらえられているという印象を持った。特に教員のみならず職員、卒業生、事業者、学生ファシリテーターなど多様なメンバーが受講生のためだけというよりは、自身のキャリア開発の一環として「主体的な学び」を獲得していくという点は、大変興味深かった。ただし、自学に取り入れるときには、「誰が、何に困っているのか」を徹底的にヒアリングすることを強調されていたので、この点に注意を払いながら、今後のFD活動に生かすことを検討したい。

3. 授業への研修成果の反映状況

本学経済学部においても、初年次教育のあり方について、非公式に話題に上ることがある。経済学部の初年次教育は日比先生の指摘される「リテラシー」獲得のための授業と位置づけられると考える。現在、一般教育担当者と専門教育担当者が共に担っているやり方を継続しながら、次年度以降の学部FD研修会でなるべく問題点を共有化することからはじめて改善に取り組みたい。

また、現在は単位履修状況の芳しくない学生に対しては個別面談を実施するのみである。鬼塚先生の取り組みを参考に中・長期的な検討課題として、本学経済学部にもマッチするような改善プログラムのあり方を考えたい。その際上記の注意点を踏まえて、また今後も学外FD研修に積極的に参加することで他の取り組み事例も学びながら、熟慮していくこととしたい。